

水戸街道を歩く（水戸～土浦）現地見学会 報告

日 時：平成20年6月14日(土曜日)

参加人数：36名

水戸→片倉（旧美野里町）→石岡一里塚→土浦市立博物館・亀城公園・銭亀

初夏の陽光と涼風を体を感じ、管理センターを8時40分頃出発した。

本日の行程は、岩城相馬街道と水戸街道の基点から土浦亀城、^{ゼニガメバシ}銭亀橋（桜川渡河）までのルートである。

水戸街道に入る前の那珂川の渡しは、明治18年に木橋が架けられたが、明治29年に洪水で流出後、大正元年に陸前浜街道唯一の鉄橋である「寿橋」がかけられた。「寿橋」は昭和61年の台風に伴う洪水による流出まで、なんと80年の風雪に耐えぬいた強橋であったことが分かる。

新「寿橋」を渡りきると（工事中のため渡れない）城下町特有の行き先を閉ざすクランク状の路が続く。

昭和7年には那珂川に「水府橋」が新たに架けられ、岩城相馬街道は、枝川から水府橋を渡るルートへ変更された。この橋は、当時としてはモダンな曲弦ワーレントラスと言われた斬新な構造で、左右に歩道が設けられている。

道路名称の変遷 明治5年に水戸街道・相馬岩城街道から陸前浜街道と変更
明治18年から国道14・15号線
大正9年から国道6号線

浜田から本町ハミングロードをぬけると、備前堀に架かる^{タマケバシ}魂消橋がある。

ここからが水戸街道が始まる。

水戸街道の基点は、現水戸市本町の備前堀に架かる鎖魂橋からで、この地から江戸までの約30里（120キロ）の道のりを二泊三日かけて行き来した。

光圀公は11回行き来したと伝えられる。



ここから西へ進み国道50号バイパスを越えると、最初の水戸一里塚がある。一里塚は、水戸街道沿に造られた、一里ごとに設けられた当時の旅の目印であった。

長岡（茨城町）の木村邸を車窓から望み、小幡、堅倉（旧美野里町）を通り石岡へ向かう。石岡竹原神社から旧道へ入り市街地へ向かう。

石岡の一里塚は、両方の塚の上に樹齢400年と推定される榎が茂っていたが、平成14年の台風で倒木してしまった。



石岡市の古い街並みおよび指定有形文化財等の案内を、石岡市教育委員会の木植茂様より、歴史絵巻的な貴重な説明を受けた。

石岡小学校前に移動して常陸国府、府中城藩主松平頼縄時代の貴重な説明を受けた。

文政11年(1828)に焼失した江戸小石川の藩邸が、再建された際に余材で石岡陣屋門が建築され、現在、石岡小学校正門脇に県指定有形文化財として保存されている。平成17・18年度史跡調査により、本城であり陣屋は現石岡小学校に位置していたことが確認された。

石岡のまちなかを散策すると、中町通り沿いに丁子屋を始め、11の時代を和むデザインの建築物が、築後50年を経過してなお建在している。



千代田・真鍋をぬけ城下町土浦に入る。土浦市では市立博物館学芸員である宮本様より管内案内を受け、亀城公園から中城周辺における歴史の小径整備状況と現地案内を、土浦市都市整備部都市計画課長東郷様他の皆様から今後の整備予定を含めた説明と案内を受けた。

城下町・土浦は霞ヶ浦に流れる河川、堀に囲まれた領域の五角形状を呈しており、低湿地帯に形成されていた。

亀城の呼び名由来は明確ではないが、湿地帯域の城であったことから、周辺の土地が水没してしまうと、城域だけが亀の甲羅状に残ることからとも言われている。



亀城公園東口から小径をたどる中城周辺は、御影石を敷き設した石畳舗装の整備が進められており、歴史的な土浦まちかど蔵「大徳」・「野村」を始めとした、古いまち並みの再現と保全から快適な居住環境、まち並み景観整備が進められている。

それぞれの地域において地元教育委員会、都市整備部の皆様より、貴重な歴史的な文化財のご案内と、まち並み整備に関する説明を賜りありがとうございました。

次回、水戸街道を歩く現地見学会の実施予定は、土浦から取手また、取手から千住までの計画を練っております。またのご賛同を賜りますようお願いいたします。